

『日本宗教伝承の諸位相 ―小野篁冥界伝承と牛頭天王信仰―』 要約

松山 由布子

本論文は、日本の宗教文化の中で伝承される物語の特質について、物語を受容する文化や社会環境との関わりに注目して論じるものである。宗教文化の中で語られる物語は、信仰上の世界、神秘的な力の発動、民間信仰の由来など、宗教文化を形成する要素として重要な役割を担っている。こうした物語は、主に中世文学研究を中心に展開した「伝承文学」研究の領域で注目され、物語の本質的なモチーフや、本文比較を通じた文化論などが行われてきた。本論文は、物語を語り継ぐ「伝承」という行為に注目し、宗教文化や社会の中で物語を語り、利用する行為と、物語との相互関係から、物語の文化的特質を明らかにする。特に、伝承されることによって生じる物語内容の変容、異なる時代状況や社会環境において同一の物語が伝承される意味について問う。

本論文では、伝承される宗教文化や社会状況の大きく異なる二つの事例を取り上げ、それぞれの事例における物語と伝承との関係について分析した。

第一部では、京都を中心に展開する小野篁の冥界伝承を取り上げ、その成立状況と、各時代の宗教文化や社会の中で小野篁伝承が物語が受容され、変容する様相を通時的に検証した。

小野篁の冥界伝承は、実在の公卿・歌人である小野篁の事跡や残された漢詩・和歌・文章などをもとに十一世紀後半から十二世紀初頭頃に小野篁を冥府の冥官とする説話が成立した。この説話は、中国より伝えられた冥府や地獄の思想を日本の宗教文化の中に結実させる「本朝の冥官」としての文化的役割を担い、中世には、説話集、『和漢朗詠集註』、天台系唱導などに引用され、地蔵信仰や祖霊信仰とも結び付いた。こうした小野篁の冥官説話の伝統は、近世以降の京都を中心に地蔵信仰や祖霊信仰の民俗行事の起源譚として展開した。ここでは小野篁は「閻魔王の化身」とされて現世と冥府の往来に焦点が当てられ、既存の物語の再解釈や、伝承から新しい伝承が創出される現象などが見出され、伝承を導く想像力が小野篁の冥界伝承を民間信仰の中に位置付けている。

小野篁冥界伝承の個々の物語は、死後の世界と現世との繋がりを説く物語の核となる部分と、物語を受容するそれぞれの文化様相との連関によって形成されている。そして京都という文化の発信地に展開したことで、文芸と在地伝承とが密接に関わり合っている。こうした物語を受容する時代や社会の状況に併せて変容する物語の流動性が、説話から在地伝承へと、時代を越えて展開する小野篁の冥界伝承の文化的特質である。

第二部では、愛知県の奥三河地域に伝えられる牛頭天王信仰を通して、都から伝えられた宗教伝承の地域展開について検証した。

奥三河の宗教文化は、土着した修験道の修行者を中心とする「里修験」と、花祭りの神事をはじめ、集落の民間信仰を担う花太夫の家という、二種類の宗教者によって構成

されている。奥三河の宗教文化は、「里修験」から花太夫への文献を伴った宗教知識の伝授と、花太夫の宗教儀礼の実践によって形成されている。奥三河に展開した牛頭天王信仰の宗教文献には牛頭天王祭文と牛頭天王法があり、京都を中心に体系化された牛頭天王信仰の中の祇園信仰と修験道の防疫修法という異なる系譜の知識が、「里修験」層を介して共に花太夫へ伝えられている。

『牛頭天王嶋渡り祭文』や『牛頭天王五段式』などの奥三河の牛頭天王信仰の詞章は、中世の尾張国津島社にて形成された信仰をもとに構成され、「里修験」層によって独自に訓読されて花太夫の元へ伝えられ、疫神祭祀で利用された。

また、奥三河圏内で独自に成立した牛頭天王祭文には『大土公神祭文』や『山の神祭文』などの他の奥三河の祭文の物語との融合が見られる。

牛頭天王信仰の奥三河地域における展開からは、外来の信仰の物語が、儀礼の中で地域の宗教文化として位置付けられる動向が見出される。奥三河に集積した宗教知識の一つである奥三河の牛頭天王信仰の詞章は、奥三河圏内で利用されるものであるが、その呪力の源は、奥三河の文献の中に取り込まれた中世以来の日本の牛頭天王信仰の伝統にあり、それを繋いでいるのが牛頭天王の物語である。

本論文で取り上げた二つの事例に見出されるように、日本の宗教文化の中で伝承される物語は、物語という形でしか表現出来ない重要な信仰の要素である。伝承する行為によって物語は繰り返し再創造され、生み出された新しい物語が、また新しい時代や文化の中で語り継がれている。